

『楠都』

（万日山の誓い・熊本の光と影の青春）

第一卷

森山 光成

『あらすじ』（作品の概要）

一 合気道で鍛え始めた主人公秀彬の泥棒撃退や家庭の日常や、父親の堯之、母親の美紗子との絆を描くところから物語は始まる。

二 父親の『三剣豪の御前試合』や『仮名手本忠臣蔵十三段目お軽・勘平の巻』の披露を楽しむ場面を描き、楽しい秀彬の家庭を描いている。父と母が、冬の雪の降る日に、喧嘩する処を初めて見て、家庭の危機を救う秀彬の思い切った振る舞いが、胸を撃つ。父と秀彬は、その日以降、更に一体になった存在だと秀彬は感じる。

三 両親と、目に見えない世界についての話をし、主人公が見えない世界について目を開かせられていくところを描く。少年らしい疑問に、正面から向き合って一緒に考えてくれる両親とそれを、真剣に受け取る秀彬。シュタイナーの世界や霊的な考え方に馴染んでいく秀彬と姉の美里の在り方を描いている。

四 海水浴と秀彬の心肺停止の死亡体験、その時に体験した意識の世界の旅。意識体になった秀彬の前に突然現れた、“ヒカルさん、という霊的存在”と一緒に旅をする。

過去や未来を旅する秀彬は貴重な見聞を得ながら、最後に、両親のいる、海水浴の海岸に戻る。大人になってからの体験ではなく、子供の時の体験であり、（カミングアウトすると狂人扱いされる）と心配して、沈黙していた秀彬だった。後で、少しずつ、両親や姉に告白するように秀彬は変わっていく。

五 隣に埼玉の安行から引っ越してきた同い年の美しい由子と、ぴったりと息の合った親友同士になった。秀彬の女性に対する目をいっそう、開かせてくれるきっかけとなる。由子は素質のある女の子だが、秀彬には、沢山のことを教えてくれる親友だった。

六 由子と共に経験した事どもを綴っていく。由子が、川崎康介さんという人から教えられた、オオクワガタの捕獲と繁殖の様子などについて描き、由子との楽しい日常の交友、思い出が重なっていく生活が続く。

七 秀彬の学校生活、小学校での激しい喧嘩と合気道の本格的稽古を始めた秀彬の日常を描いて、さらに強くなっていく秀彬の姿を描きだしている。

八 家族や由子と共に行った大晦日の晩の、金峰山系の一、二、三の岳の縦走の思い出は、秀彬にとって、貴重な思い出になった。由子と一緒に見た、暗闇の中をひらひらと赤い目を輝かせながら飛ぶフクロウや、三の岳で見た日の出など、熊本の人たちもあまりしなかった経験のない、金峰山の三つの岳の縦走の経験は、秀彬にとって貴重な体験だった。

九 熊本を襲った豪雨、近所の崖崩れで逝ってしまった由子。秀彬は、大きな悲しみに包まれる。代え難い由子と言う親友との永遠の別れは、秀彬に（人間の生と死について）もっと深く考えさせる機会になっていった。

一〇 人の死に際して魂を送り出す『ポアの行』につき秀彬は美紗子から唱え方を教えられ、覚える。毎日、『ポアの行』を由子の為に秀彬は唱え、マスターしていく。

一一 秀彬、多くの疑問に捉えられて、それらを解いていくべく問題の本質的な核心に迫る調査をしていき、それをもとに（将来、納得のいく作品をものにする作家に成る）との志を抱き始める。

一二 近くの神社で、秀彬は、青大将の大蛇の頭を撫でて交感し始める。その様子を偶々見ていた老師と相まみえ、親しくなる。

一三 老師の申し出で両親の許しを得て“師道を厳にした教え”を秀彬が受け始める。人間としての道や社会情勢についての教えを説く師を秀彬は尊敬を持って受け入れる。

一四 海野老師夫人の医者仲間の友人、素晴らしい山野奈美さんを知る。奈美さんは、六十歳以下に見える、十年前に病院理事長だった夫を亡くした未亡人だったが、高齢の妙なる婦人で、秀彬は、出会って以来、憧れの目を持って奈美さんを見ていた。会うたびに秀彬は胸を躍らせ、熱い思いを抱いて崇敬する存在の奈美さんだった。長年、秀彬は、その思いを秘めて過ごした。

一五 秀彬、国語の夏休みの宿題で、“将来何になりたいか”と課題を出され、栗山先生に“作家になる”と宣言。先生は、気になったのか、家庭訪問で、秀彬や美紗子と話

に来る。

一六 栗山先生が立派な作家になるということとは、どういうことか、真剣に考えを伝えてくれる。先生も、作家に成りたいらなかった。

一七 リルケやロダン、コクトーについて、多くを知る。

（リルケ、「マルテの手記」のあとがき、大山定一訳、新潮文庫刊）から。

「リルケのパリでの生活は、全く無名な孤独の生活だった。ジャン・コクトーはリルケと同じアパートに住んでいたが、リルケはほとんど誰とも行き来をしなかった。一方、コクトーは名声と若い時の血気に任せて、乱暴な生活の絶頂だったらしい。彼は後年『思ひ出の人々』の中で次のようなことを言っている。

「毎晩、おそくまで、いつも（共同邸宅であるオテル「ロビン」の）隅の窓の一つに灯りが灯っていた。私は、ずっと後になって初めてそれが誰の部屋だったかを知る事ができた。あの夜更けのランプはロダンの秘書をしていたリルケの部屋だったのだ。私は既に世の中を知り尽くしたつもりでいた。無知で僭越な下らぬ青春の日々を過ごしていた。名声が僕を損ない始めていた。僕は無名や失意よりもなお始末に悪い名声がある一方、全ての名声より一層偉大な失意の時代がある事を知らなかった。リルケの遠い友情が、夜更けの侘しいランプの光をとおり他日どんな慰めを与えてくれるかまだ私は少しも気づかずにいた」と

秀彬は、その文章を先生から聞いて、「無名や失意よりも、なお始末に悪い名声がある一方、全ての名声より一層偉大な失意の時代がある事を知らなかった」という箇所を、清らかな芸術家の真摯な姿を覗き見た感じを持って、心を締め付けられながら繰り返し考えた。秀彬は、「この言葉を、忘れずに心に刻んで、将来の芸術への道を歩いて行くのだ」と決心する。

一八 秀彬の中学生としての日常を描く。優秀で清潔な感じを漂わせていると思われるが、丁寧に無視していたが、思い直して、全ての相手、また、優れたところを持つていると思う全ての年齢に関係ない女性と出来るだけ話をし、付き合う事が出来れば、そうしたいと決心し、時間の許す範囲内で付き合い始めた。秀彬の志は、どんな欲に、色々と人間を知る機会を求めて、生きるやり方を選んだ。

一九 秀彬の高校生活は、合気道と読書と学習に明け暮れる生活だが、美紗子の注意深い食事の内容の所為で、疲れを知らなかった。

二〇 山科老師による『修證義』へしゅしようぎの解説を受けた秀彬は、いよいよ、「生きる時には、どういう態度で生きて行くべきか」を理解していく。秀彬の感覚は、益々鋭くなっていた。

二一 典座和尚の重要性と三心についての、道元禪師の教えは、生きると言う事につい

てんぞ

て更に秀彬の心に歩むべき道を示唆するものだった。

二二 老師の紹介で、米国人の作家志望のジェーンと貴重な出会いを持つ。ジェーンは、アメリカのアリゾナのセドナ出身、スタンフォードを卒業した、日本に大きな興味を持ち来日した、美しい女性だった。

二三 ジェーンがかつて大きな興味を持って読みこなし『オアスペ』の紹介で、色々な事柄を知ることが出来るようになった秀彬は、根本的な、地球上の歴史、問題を理解するようになる。人によっては、括弧に括りたい課題も、秀彬にとっては、真剣な考察に値する事項だった。直感で判断しても、おかしいと思われることは、秀彬にとっては、ないに等しかった。人は人、自分は、世間の常識には捕らわれず、正確に判断するために、力を尽くしてジェーンと向き合った。

二四 『オアスペ』に描かれたパン大陸の沈没は何故起こったか、について、書かれている内容を無暗に「飛んだ内容」として否定しないで、正面から向き合う秀彬だった。

二五 パン大陸の沈没につながる、日本についての情報が描かれた『オアスペ』には、驚くばかりの情報が盛り込まれていた。ムー大陸についてのチャーチワードの書籍は、『オアスペ』から、四十五年も後に書かれたものである。秀彬にとっては、チャーチワードの「ムー大陸」は、パン大陸のパクリではないかと思われてならなかった。パン大陸の残骸、ザ・パンを、『オアスペ』を自動書記されたジョン・ニューブローは、日本には

全く関係ない人であるのに、“ザ・パンは、今では、ジャパンと言われた国だ”と明確に自動書記で書かされている。日本の将来における使命についても、医師のジョン・ニユーブローは、はっきりと、『オアスペ』の中で述べているのだった。

二六 ジェーンが、米国の伯父さんから与えられた情報、アダムスキーとUFOに乗ってきた、金星由来の**人類**、土星や火星からの地球外の人類との友好によって得られた情報は、秀彬の家族にとって、無視できない情報だった。アダムスキーとマスターの『宇宙の調和の法則に則って生きる』という教えは秀彬に生き方を示唆する、重要な教えを含んでいた。秀彬は、多くの情報を理解しようと、真剣になる。

二七 ジェーンが、矢張り、米国の伯父さんを経て入手した情報は、秀彬に多くの示唆を与えるものだった。ジェーンは、南アフリカに住むエリザベス・クララーと、彼女から伯父さんが与えられた、新しい知識を秀彬たちに語って呉れる。

二八 **エリザベス・クララー**の、地球の人類にとって重要な内容を含んでいる地球人類への伝言は、真剣に考えなければならぬ内容を含んでいた。秀彬と家族は、ジェーンと真剣な質疑を繰り返し、課題を理解していく。

二九 堯之が東京出張に行った際、芳村思風先生という哲学者を紹介される。堯之は帰郷後、家族に、“感性論哲学”を詳しく紹介する。秀彬は、“感性論哲学”を知り、心の底から共鳴できる内容に充ちていることを知る。内容は、アダムスキーやエリザベス

・クララーが、口が酸っぱくなるほど、地球上の人類に言い続けていたことと、全く軌を一にしていた。ソクラテス以降の哲学を今の人類が超えていかなければいけない示唆に富む哲学だった。秀彬は、そういう哲学者が、**日本にいて**「感性論哲学」を唱道して久しいと知って、驚くと同時に、世界中の多くの人々が理解すべき哲学として、今日本に存在すると確信を持った。

三〇 秀彬の大学選択と入学後の大学生活を描いている。秀彬は、入学後、合気道部に顧問として在籍し、部を支援する。美しい文学部の杉山志津子と、好誼を持つようになる。

三一 秀彬、美しい杉山志津子と初回のデート。志津さんは、結婚願望のない、自由に生きようとする、強い女性だった。秀彬と志津さんは、お互いに次第に惹かれていく。志津さんは、秀彬の家を訪れた後、秀彬の実像を知って、心を許し、恋人同士として、付き合うようになる。秀彬と志津さんは、自然に、身体を許し合う中になっていく。

三二 大学に入って間もない頃、秀彬が老師の家から帰ろうとすると、「熊本に留まることになった秀彬君と一緒に先輩として話でもしてやってくれ」という老師の言葉で、秀彬と奈美さんは、一緒に奈美さんの車で帰ることになる。昼飯時なので、奈美さんの「食事でも一緒にする？」と言う言葉で、秀彬は、一番近い、奈美さん行きつけの料亭でランチを摂ることになった。

ランチを待つ間に、秀彬と奈美さんは、初めて、膝を突き合わせて、話をする機会を

持った。話の行きがかり上、秀彬は、今迄、心の中で温めていた思いを、軽妙なやり取りをしながら、チャンスを逃がして後悔がないように、思い切ってぶつつける。非常に大胆な、秀彬の行動だった。そこには、前提として、秀彬も奈美さんもお互いをよく知っている、若者と高齡の婦人である、という違いだけがある関係だったからだ。結果的に、熟慮の上で、間を置かず、奈美さんは、決断し、秀彬を受け入れ、奈美さんの屋敷へ行くことになる。この辺りのやりとりは、思いもかけず、秀彬の将来を大きく決める決定的な行動となった。

秀彬は、奈美さんの屋敷へ行く途中で、我が家に寄る。奈美さんが、秀彬の書いた原稿を読み、秀彬が、奈美さんが一人暮らしをしている白川河畔の豪邸と一緒にいる。秀彬が仮眠している間に、奈美さんは、原稿を読み、秀彬が結構長く仮眠していて、目覚めると、奈美さんの目くるめく誘いを受けて、一緒に入浴する。甘美な夢に充ちた、大人の奈美さんと秀彬の付き合いははじめとなった。

それ以降も、秀彬は、奈美さんと歓喜に満ちた愛の営みを持って過ごすようになる。時々、結婚願望のない、志津さんと付き合っている。

三三 秀彬は、カットのない原語の『チャタレー夫人の恋人』を再読する。速読で読破しながら、速記で内容を纏め、理解するように努める。読後に、志津さんに貸して、彼女も読破していく。ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』は、専ら、セックスを描いた作品ではなく、自分に最も合う恋人を探し求めていく、むしろ真剣な恋愛小説的な作品だと、秀彬は思った。

三四 秀彬が奈美さんに『ルガーノの春』と言う作品を読ませた。読後、長く考えていた奈美さんの発案で、二人は、秀彬の両親の許しを得て、奈美さんの付き添いと言う形で、ヘルマン・ヘッセが終の棲家として住んだ屋敷のある、スイスのルガーノへと旅に出る。旅は、二人の目くるめくような、愛の歓びに満ちた日々だった。秀彬は、胸に、スイスやイタリアの風景を刻み、文章スケッチをして、奈美さんと、心に残る歓喜を味わいながら旅を続けた。

三五 熊本に帰った後も、奈美さんとの熱い生活を描き、人間にとって何が大事か理解していく秀彬。

三六 秀彬、モンロー研究所のヘミ・シンク・セミナーへ行く。

三七 夏休み前に、医学部の高嶺の花、清水亜樹子との邂逅。秀彬は、志津さんに断つて、禁欲の夏休みを送った。夏休みが終わると、やるべきことが出てきたと感じたのだ。夏休みの最中、秀彬は、読書と秋の試験準備、家の植木畑の作業に精を出した。

三八 わが観音菩薩像について、秀彬は、美紗子から、伯父の身にあった過去の出来事を聞かされ、“後悔しないように、亜樹さんにぶつつかって行きなさい”と、諭される。

伯父さんは、かつて、書生として住み込んでいた屋敷の、嫁に行ったお嬢さんから、その死の直前に親展で送られた手紙を受けとっていた。親展の手紙には、お嬢さんの心からの思いが認められていた。

『一言でもいい、もし、私への思いを、あなたが示して頂いたら、父に言って、あなた様のお嫁さんになります、**と**言える時を待っていました。でも、その一言の言葉も、あなた様からありませんでした。おぼこだった私は、父に何も言えずに、決められたかたに嫁ぎました。嫁いだ先の相手は、良い方でした。でも、私は、今死んでいく前に、あなたに、かつての私の真剣な思いを伝えずに、死んでいくことは、叶いません。せめて、ひと言、あなたを心からお慕い申しておりましたとお伝えせずに、あの世に行くことは、できません。

でも、もう、こうやって、お伝えすることができません。だから、心残りなく、旅立っていく事が出来ます。あなたが、この手紙をお読みになる時には、私は、もう旅立っておりません。どうか、はしたないこととお思いにならず、私の真情をお**汲み**いただければ、思い残すことはございません。どうかいつまでも、お元氣でお過ごしになりますように、あの世から、**あなた様を**、見守りさせて頂きます。どうか、ごきげんよう』と。

「伯父さんは、そのお嬢さんからの手紙を読んで、涙が止まらず、心から悔いたと私に言ったの。そして、お嬢さんは我が観音菩薩だって」と美紗子は、秀彬に言って聞かせた。「だから、本当に、この亜樹さんというお嬢さんを好きだと心から思うのだったら、後悔しないように、この、亜樹さんと言うお嬢さんに、あなたの全てをかけて、当たっ

ていくのよ”と、秀彬に、言い聞かせた。

三九 秀彬は、夏休みの稷の期間が終わると、試験が終わってすぐに、行動に移っていた。出来るだけ多くの状況を調べ上げ、亜樹さんへの接近を図っていく。待ち受けなどという、ストーリーカー紛いの行動を避け、秀彬は、直接、亜樹さんの家を訪れ、自分を曝け出して、相手に自分の真骨頂を理解してもらうように、全力を尽くす。

まず、手紙を書いた。その上で、父親が弁護士をしていると分かった、亜樹さんの家へ、礼儀正しく訪れる。留守だった亜樹さんの代わりに、素性をはっきりと言って、母親と話す機会を貰う。後で、亜樹さんの父親は、堯之の熊本高校の同窓生だったと解る。偶然の、巡り合わせだった。

再度、亜樹さんの自宅に行くと、亜樹さんと母親は、面会してくれる。暫く話して、秀彬の真情を汲んでくれた母娘は、ともに、秀彬を受け入れてくれた。

そこで、秀彬は、思い切って、尋ねる。亜樹さんにもう決めたお相手はいらっしゃるのでしょうか？”と。亜樹さんは、明言する。まだ決めた方はありませんと。それを聞いた秀彬は、この際、二人の前で、はっきりと訊く決心をして尋ねる。“もし、お付き合いをして、お互いに認め合ったら、結婚にまで、いいのでしょうか？”と。すると、母親も亜樹さんも、別室で暫く話していて、秀彬を見抜いたのか、“お互いに、認め合ったら、それは、自然な結果でしょうね”と、はっきりと答えてくれた。その後で、秀彬と亜樹さんは、水前寺公園を散歩しながら、更なる、友好を図り合った。秀彬は、

やるべきことをやり終えたと言う気持ちで帰宅し、美紗子に報告した。

四〇 亜樹さんとの繋がりを持てた秀彬は、秘密にしておかず、奈美さんに報告します。奈美さんは、女優に勝るとも劣らない雰囲気を感じた、**宝塚の歴史上、最も美しい人と言われる「北原瑤子」に似た**亜樹さんの写真を見てびっくり、「この娘さんは素晴らしい。あなたの、今からの人生で、二度とこのような素敵な女性が現れることは非常に稀よ。このチャンス逃がしちゃいけない。もう高齢の自分のことはこの位にして、若い者同士で付き合うことを優先しなさい」とコメントします。でも、結局、奈美さんと深く契りあった秀彬は、奈美さんを、離れることは、できません。結局濃密な、熊本の光と影の青春の真ただ中を、秀彬は生きていくことになります。幾ら奈美さんが健康で鍛えた体を持っていたとしても、これから、何十年と生きる寿命を許されているとは思えません。秀彬は、奈美さんが身罷る最後まで、付き合い続けて行くしかないだろう、と自覚します。年をとっても衰えを知らない、それだけ素晴らしい奈美さんでした。

四一 付き合いが深まってくと、当然、**恋人同士の**、交情への期待は、双方で高まっていく。秀彬らの部屋で、愛を交わそうとした時に、亜樹さんは、「お互いの間で愛の交歓を行う前に、神聖な「愛の儀式」を執り行おうよ」と提案する。数日後に、両親が、博多に行つて自宅にいない日があると言う。

その日がくると、秀彬と亜樹さんの「愛の儀式」が亜樹さんの家で、三日に渡って執り行われた。そして、三日目に、秀彬は、莊厳で、お互いに完璧に合意をしたうえで、亜樹さんと、麗しく歓びに満ちた結合を経験し、カップルとして肉体的、精神的に結ばれた。

四二 十月の中秋の名月の日、秀彬と亜樹さんは、万日山に徹夜で出かける。娘の亜樹さんを信用している両親は、何も、言わないでくれていた。夜つびで、名月を觀賞し、西の有明海を金色に染めながら沈んでいった名月を見送った後、秀彬は、万日山と言う山の名前の存在から、インスピレーションを吹き込まれる。そこで、「万日と言う年月を費やして作家と言う芸術家として成功するように作品を書いていく。合気道や読書を含めた、これら三つの事柄を、建築家としての専門の職業を持って、生きていきながら、回転させ続けるのだ」という内容だった。

「万日が、一万日か二万日かわからぬ。だが、おまえは、その志を完遂するのだ」と、秀彬の全身を震わせたインスピレーションが語っていた。秀彬は、自分と亜樹さんに誓い、この誓いは、万日が来て、志を完遂する迄、二人以外には、秘密の誓いにする、と決意した。秀彬は、（自分はこれに命をかける、自分の人生をこういう生き方にかけると決意したのだった。亜樹さんは、万日山の誓いの、唯一の証人であり、同伴者だった。）

四三 海野老師は、秀彬が亜樹さんを生涯の相手と選んだと知って、秀彬に言って聞か

せる。秀彬の将来の結婚生活への教えを、蘊蓄を傾けて披露してくれるのだった。貝原益軒の「接して漏らさず」についても、重要な指針として、秀彬に教えてくれた老師だった。

四四 ある日、東京と青森から来客があった。日本の古代史について研究を続けている、堯之の古くからの仲間だった。安日彦の本拠地について東京から訪れた安彦克之さんが話して呉れた。秀彬には、日本の成り立ちを正確に知り、確認する上で、貴重な機会であった。

四五 同じく弘前から訪れた藤本光幸さんが、日本列島の成り立ちと耶麻堆国（邪馬台国）の成立についての正確な情報を話して呉れた。今までの、邪馬台国についての論争に、決着のつくような話の内容だった。

四六 安彦さんの「荒覇吐族」による東日流王国の話も、史実に基づく話で、興味をそそる内容が沢山盛られていた。

四七 アラハバキ神の神訓『神は人の上に人を造らず、人の下に人を造り給うなし』という文句の、元々の出所についての真実を聞き、秀彬は「そういう事だったのか」と、事実を再認識する機会を得た。

四八 安彦さんによる宮沢遺跡の考察についての話は、彼だけが今まで注目している内容で、非常に興味を引く内容だったが、将来注目されるに違いないと秀彬も思った。

四九 「中尊寺」を『和田家文書』から考察した、安彦さんの話は、中尊寺の歴史について、正確さを期した、分析であると思わせるものだった。

五〇 立花隆さんに「あなたの体験は、臨死体験ではなく、死亡体験だった」と言われた木内鶴彦さんが、詳細な死亡体験と、それにまつわる、地球人の心構えについて、詳しく話して呉れた内容は、秀彬を納得させるものだった。彼の言葉は、秀彬の心を満たし、覚えて、理解するだけではなく、実行していかねばいけない内容として、秀彬を導くものとなった。

五一 美里が、半身不随となった交通事故に遭った。奈美さんが提案して、受けた、骨髓由来葉系幹細胞のロシアでの点滴が美里を救った。骨髓由来葉系幹細胞の点滴は、驚異的な、効果を発揮した、処置だった。美里は、三回のロシアでの出張点滴に**加え**、リハビリも熱心にやったお陰で、正常な体に戻った。奈美さんの貢献は、秀彬の家庭を救ってくれたのだった。秀彬は、奈美さんに心から感謝するだけで、何もお礼らしいことはできなかった。どうやって、奈美さんに報いればいいのか、分からなかった。

五二 アメリカのジョージアでのモンロー研で行われているヘミ・シンクの訓練に、秀彬が大きな興味を示すのを見て、奈美さんの提案で、秀彬は、アメリカのモンロー研究所にセミナーを受けに行く。そのセッションで、秀彬が、由子に遭うというハプニングが起こった。五ヘルツの差音を耳に入れながら、行われるセッションでは、霊界との交信が確かなにされるようだった。何故かは、今後の、秀彬の課題だった。

秀彬は、緯度と経度の数字だけがホワイトボードに示され、その場所がどういふ風景か、与えられた紙に書きなさい、という質問に、*“赤い岩山と緑の樹々が繁る光景”*が、脳裏に浮かんだので、書き込んで隣の人と、書いたものを交換した。

皆が書き終わった後で、講義の先生が、前もって撮影された風景をプロジェクタで投影すると、秀彬だけが書き込んだ通りの光景が、プロジェクタに映しだされた。出席者全員から、秀彬は拍手を受けると言う、珍事があった。

秀彬は、その時に、感覚が鋭くなっていたのを感じていたが、何故、ぴったりの風景を、緯度経度の数字を見て、思い描いたのか、分からなかった。当の風景は先生が、セミナーに来る前に、撮影してきた、住む町の一つの風景だった。

五三 その後の秀彬の大学生活は、近い将来、留学することを決めたフランク・ロイド・ライトの創った、タリエセン・ウエスト建築学校への、マスターコースへの留学を視野に入れながら、大学生活を送っていく。

五四 大学四年生を終える前から準備し、願書を出していたタリエセン・ウエスト建築学校への入学許可が来ると、秀彬は、留学に向けての準備を怠らず、生活を送った。奈美さんと話をしているうちに、決まった、奈美さんのセドナへの移住計画も決まった。秀彬が留学している期間内に、奈美さんは、セドナに住むことに決まった。

五五 入学前に、秀彬と美紗子は、アメリカのスコッツデールの秀彬の寄宿先と一緒に訪れ、序に、美紗子は、秀彬と一緒に、観光旅行を終えて帰っていった。奈美さんは、その後で、アメリカを訪れ、ジェーンさんの紹介で決めた、セドナの美しい邸宅を借りて、秀彬にいる期間だけ、セドナへ移住した。週末や休暇の度に、秀彬は必ずセドナを訪れる。セドナでは、秀彬と奈美さんは、甘い生活を送った。心の呵責を覚えながらも、どうしようと言うのだろう、と、秀彬は、思いながら、奈美さんとの甘い生活を送っていく。そこで、奈美さんと秀彬が約束したのは、秀彬の帰国後、二年経って、秀彬と亜樹さんが結婚式を挙げる迄は、付き合いを続けるという、約束だった。それ以外に、どうすればいいのだと、秀彬は、やりきれなかったが、身勝手な思いを持ち続けるしかない状況を、後ろめたく思いながら、送らざるを得なかった。

五六 奈美さんは、先に帰国して、秀彬は、暫く経って帰国した。帰国すると、秀彬は、最終的に、奈美さんの紹介してくれた、秀彬も知っている、有能な建築家の事務所で、

働き、一級建築士の資格を取って、建築家としてのキャリアを歩み始めた。二年後には、亜樹さんとの結婚式も正式に決まった。亜樹さんは、今や、既に、医局生として、病院で働き始めていた。

五七 秀彬が帰国して会ったジェーンさんが、スタンフォードの友人から聞いた『量子もつれ』についての話をしてくれた。明らかに、秀彬が求めている、宇宙を満たしているものについての、現在の科学が、到達した素晴らしい内容だった。

五八 秀彬が熊本に帰ってから、これまでの方針に従っての生活が、続いていく。秀彬は、力を尽くして、万日の誓いを守って、生活を続けていった。

あらすじ おわり